

ヘーゲルの矛盾論

——形式論理学における「矛盾」との関連において——

伊坂青司

伝統的な形式論理学では、矛盾は矛盾律により排除されるが、それに対してヘーゲルが「すべてのものはそれ自身において矛盾している」⁽¹⁾というように矛盾を積極的に認める発言をしていることは周知の通りである。ヘーゲルは矛盾律で禁じられる矛盾と同義で「矛盾」を論じているのかどうか、そうでないとするれば、ヘーゲルは「矛盾」という概念によって何を意味しようとしていたのが解明されなければならぬ。

一

ヘーゲルが直接の批判の対象にしている矛盾律は、近代になって定式化されたもので、「Aは同時にAでありかつ非A

ではあり得ない」(W.L. 45 同じことであるが「Aは非Aではあり得ない」とも表現される)と表現される。この矛盾律は、概念の形式的な同一性を要求するもので、「AはAである」という同一律の否定的形式における表現であるにすぎない。ヘーゲルは思考の原理として定式化された同一律に対して、「空虚な同語反復の表現」(W.L. 41) という批判をし、又、矛盾律に対しても「矛盾律は、その表現のうちに空虚で単純な自己同等性 ($A \equiv A$) やその他者一般 (Nicht-A) だけを含むのみでなく、絶対的な不等性、つまり矛盾さえも含んでいる」(W.L. 45) という批判的論点を提起している。ヘーゲルの批判の矛先は、同一律や矛盾律を思考原理とする近代の形式論理学の形式性に向けられていたのである。⁽²⁾

矛盾律はもともとアリストテレスによって、「同じもの〔同じ属性・述語〕が同時に、そしてまた同じ事情のもとで、同じもの〔同じ基体・主語〕に属し且つ属しないということとは不可能である」と定式化された。この矛盾律は、同じものに同時に肯定しかつ否定して同じ述語を付加することを禁じたもので、主概念と賓概念が同一のものであることを必ずしも前提にはしていない。ところが近代に至って定式化された矛盾律は、主概念と賓概念の同一性を原理とする同一律の否定的形式における表現であるにすぎない。

アリストテレスの言う矛盾は、例えば、「このものは黒である」と言明しておいて、同時に同じ事情のもとで「このものは黒ではない」と言明することである。ここでは、時間の経過や条件の変化、あるいは観点の移動は許されてはいない。もしそれらが許されるなら、この二つの命題はともに真であり得るので矛盾ではなくなる。矛盾しあう二つの命題の間には、一方が真ならば必ず他方は偽であり、一方が偽ならば必ず他方は真であるという関係が成り立たなければならぬのである。従って矛盾しあう命題では、一方が他方を形式的に否定するだけであって、否定命題の方に新たに何か別の規定が付け加えられているわけではない。「このものは黒である」に対して「このものは白である」が同時に言明されても、両命題は矛盾の関係にはない。「このものは黒でもなく、

白でもない」という言明が成り立ち得るように、黒と白に対して第三の中間概念（例えば灰色）が考えられる。しかし矛盾する二命題では、中間の賓概念を考えることはできない。なぜなら、「このものは黒でありかつ同時に黒ではない」という矛盾を表わす命題では、存在するものの色という外延において、全ての色が尽されているからである。又、「このものは同時に大でありかつ小である」は矛盾ではない。なぜならこの命題は、「このものはAは、Bと比べてみれば大であり、かつ同時に、Cと比べてみれば小である」を簡潔に表現したものと考えられ、観点の移動を許しているからである。

アリストテレスの矛盾律は、彼の形而上学と不可分に結びついている。時間の経過や条件の変化などを許さない矛盾律は、「ある（存在）」と「ない（非存在）」の両立を禁じるので、存在する個物を表現する場合に、運動の否定に繋がってゆく。この点では、アリストテレスの論理学は、ヘーゲルの論理学が運動を中軸に据えているのと対照的である。しかしそのことは、アリストテレスの論理学が存在の論理学（オントロジー）であることを妨げるものではない。それに対して近代の同一律・矛盾律は、そのうちから存在するものを消去しており、単なる思考の形式的原理であるにすぎないから、それらを原理とする形式論理学は存在するものに係わることではない。「Aは非Aではあり得ない」は、Aの概念内容

に立ち入らず、内容を捨象したところに成り立っている。むしろ、Aという概念の形式的同一性のみが要求されているのである。アリストテレスの矛盾律は、主概念と賓概念が異なるので総合的であり得るのと対照的に、近代の矛盾律は分析的であるにすぎない。

カントの矛盾律批判も、その点に向けられている。カントは、矛盾律を分析的判断にとつては普遍的原理たり得るとしながら、総合的判断にとつては不十分であると、矛盾律に限界設定をした。カントは、矛盾律とは異なる原理が必要だと考えたのである。⁽⁵⁾ 例えば、世界が空間的時間的に限界をもつという定立に対して、同等の資格をもつて、世界は空間的時間的に限界をもたないという反定立が対立する。⁽⁶⁾ この両命題が同時に言明されると、それは矛盾である。しかし両命題が同等の資格をもつ以上、どちらか一方のみを真とし他方を偽とするわけにはゆかない。こうしてカントは、理性が不可避的に二律背反（アンチノミー）に陥らざるを得ないことを指摘したのである。カントは単に思考の原理に留まらず、世界という存在について語っているのである。ヘーゲルは明らかに、カントの直面した二律背反という事態を自らの課題として引き受けている。ヘーゲルは矛盾律を逆手にとり、矛盾律のうちに孕まれた「総合的本性」を刷出し、矛盾律の限界を超えようとする。ヘーゲルの矛盾律批判が目指すのは、思惟

と同時に存在の論理学の構築である。

近代の形式論理学は、存在するものの内容を捨象する。ここに、それが妥当する限界があると言わなければならない。もし論理学が思考の形式のみを対象とするに留まらず、存在するものの内容に係わるのだとすれば、形式論理学だけでは不十分である。アンリ・ルフェーブルは、形式論理学の限界と内容の論理学の必要性を、次のように簡潔かつ適確に述べている。「……形式論理学・形式の論理学は抽象の論理学である。わたしたちの思惟がこのような内容の一時的還元をした後で内容を再確保すべくそちらへ回帰するときに、形式論理学は不十分なことが確かめられる。形式論理学には具体的論理学——形式論理学が一要素、その形式面での価値はあるが近似的・不完全な素描にすぎないような内容の論理学——がとつて代わらなければならない」。⁽⁷⁾ ヘーゲルが矛盾律批判を通して目指したのも「内容の論理学」に他ならなかったと言えよう。そしてヘーゲルは、矛盾こそが「あらゆる運動と生命性の根源」（WL, 75）であるとするのである。

二

ヘーゲルは矛盾を、対立する二つの規定の相対的関係において論じている。アリストテレスは「対立」を四種に大別しており、そのうち肯定と否定の対立を「矛盾」とし、それと

は別の対立の一種として「相對關係」を論じている。⁽⁸⁾ヘーゲルの言う「矛盾」は、むしろこの「相對關係」と対応しており、アリストテレスの言う「矛盾」とは別種のものだと言わなければならない。すなわちヘーゲルにおいては、肯定と否定の關係が矛盾として論じられているのではないのである。⁽⁹⁾われわれは、ヘーゲルの所謂「大論理学」における「対立」についての議論を踏まえて、そこから展開される「矛盾」論を検討することにしよう。

ヘーゲルは「対立」を、肯定的なもの (das Positive) と 否定的なもの (das Negative) の關係において論じている。肯定的なもの は「不等性への關係を自分のうちに含んで自己に反映した自己との同等性」であり、否定的なもの は「自分の非存在つまり同等性への關係を自分自身のうちに含む不等性」であるとされている (WtL, 56)。同等性が 肯定的なもの と言われ、不等性が 否定的なもの と言われているように、肯定的なもの も 否定的なもの と言われ、關係を表わす規定である。肯定的なもの は、自己に等しいという關係をもつことにより不等性に既に關係し、否定的なもの は、自己に不等であるという關係をもつことにより既に同等性に關係しているわけである。従って、肯定的なもの と 否定的なもの は「それぞれが、自分に固有の他者に関係するものとしてのみ自分自身に関係するのであ

る」(WtL, 56)。両者は相互に他者を照らし、そのことを通じて自己自身を照らし返す關係にあるので、ヘーゲルはそのそれぞれを鏡の反射に準えて「反照規定 (die Reflexionsbestimmung)」と呼んでいる。われわれは、ヘーゲルが両者を「概念」と呼ばずに「規定」としていることに注意しておきたい。

ところで又、肯定的なもの は 否定的なもの ではなく、否定的なもの は 肯定的なもの ではないというように、それぞれの反照規定は、その他者を排除してそれ自身の自立性をもつとされている。この点から言えばそれぞれの反照規定は、「他者が、ないかぎりにおいてある」(WtL, 57) ということになる。しかしこのことが言われるためには、それぞれの反照規定は、自分自身に固有の他者と不可分に關係していることを前提していなければならないであろう。こうして二つの反照規定の間には、相互に不可分の關係にありながら、相互に他者を排除するという關係が成り立っているわけである。ヘーゲルは、このような二つの反照規定の間の關係を「対立」としているのである。

このような「対立」と対比してみると、「矛盾」はヘーゲルによってどのように考えられているのであろうか。ヘーゲルは引き続き 肯定的なもの と 否定的なもの という反照二規定を用いて、矛盾の構造を次のように「対立」から展

開して論述している。「一方(の自立的な反照規定)は、肯定的なものであり、他方は否定的なものであるが、前者はそれ自身において肯定的なものとして、後者はそれ自身において否定的なものとしてある。それぞれは、他者に対して没交渉な自分だけの自立性をもつが、それは、それぞれが自分にとっての他のモメントへの関係を自分自身においてもつからである。従ってそれぞれは、自分のうちに閉じ込められた対立全体である。——この全体として、それぞれは自分の他者を介して自己と媒介され、この自分の他者を含んでいる(enth-alten)。しかし更に、それぞれは、自分の他者の非存在を介して自己と媒介されてもいる。だからそれぞれは、自立的に存在する統一であり、他者を自己から排除する(ausschließen)」(WL, 64-65)。このヘーゲルの記述は、「対立」についてのそれと比べると、反照規定の「自立性(die Selbständigkeit)」に主導的役割を与えている。こうしてヘーゲルは、 \langle 肯定的なもの \rangle と \langle 否定的なもの \rangle に対して新たに「自立的な反照二規定(die selbständige Reflexionsbestimmungen)」という名を与えている。ヘーゲルは誤解を避けるために注意深く用語を選んでいるが、自立的な反照規定は実は、形式論理学で一般に「概念」と呼ばれているものである。ヘーゲルが解明しようとしているのは、自立的な反照規定がどのような内的構造において成り立っているのかということ

とである。 \langle 肯定的なもの \rangle は、不等性への関係を介して自分に同等なものとして自己に関係するのであり、既にそれ自身のうちに不等性への関係を含んでいると説明されていた。ヘーゲルは、 \langle 肯定的なもの \rangle が自立性をもつのは、同等性が対立する不等性つまり \langle 否定的なもの \rangle を \langle 肯定的なもの \rangle が自己内に「含む」からだとしているわけである。しかし同時に \langle 肯定的なもの \rangle は、不等性を自己から「排除する」ことにより同等性であるとも説明されている。こうして \langle 肯定的なもの \rangle は、不等性を自己から排除することにより、自分の自立性をも自己から排除することになる、とヘーゲルは結論づけるのである。ヘーゲルの説明によれば、 \langle 肯定的なもの \rangle が「矛盾」であるのは、「肯定的なもの」が、自己同一性を措定するものとして否定的なものを排除することにより、自分自身を或るものの否定的なものに、つまりそれが自分から排除する他者にしてしまう」(WL, 65)からである。つまり、 \langle 肯定的なもの \rangle がその他者である \langle 否定的なもの \rangle に移行し転換するということが「矛盾」だとされているわけである。

又 \langle 否定的なもの \rangle について、ヘーゲルはそれが「矛盾」であることを次のように説明する。 \langle 否定的なもの \rangle は、「自己との不等性のうちへ反照したものとして、措定されたものである」が、「その不等性のうちへの反照はむしろ否定的な

の自己自身への関係である」。つまり「否定的なもの」は、それ自身同等性に対立する不等性であるが、そのことによつてむしろ「自己と同一である」のだから、「排除する反映により自己自身を自己から排除する」とされるのである (Wt. 80)。すなわちヘーゲルの説明に従えば、「否定的なもの」は同等性に対立することでもむしろ自己に同等なのだから、それは「肯定的なもの」に転換するということになる。

「(自立的な) 反映規定は、その自立性のうちで、それ自身の自立性を自分から排除することになる」(Wt. 80) というヘーゲルの矛盾論理は、形式論理学の同一律から見れば、不条理以外の何ものでもないであろう。なぜなら、自立性は自立性でないということが語られ、「肯定的なもの」は「否定的なもの」に、「否定的なもの」は「肯定的なもの」に転じると言われているからである。ヘーゲルの議論は、一見すると「肯定的なもの」|| 同等性、「否定的なもの」|| 不等性という同一のレヴェルでの等式を立てているように見えるが、実はそうではない。ヘーゲルは、同等性と不等性を「肯定的なもの」と「否定的なもの」が何であるかを述定するものとして用いたのであるから、その場合には、「肯定的なもの」と「否定的なもの」は主概念の位置を占めているわけである。主概念とそれについての述定は当然レヴェルが異なるから、「肯定的なもの」が同等性から不等性に転じ、又「否定的なもの」が

不等性から同等性に転じることとも可能なのである。ヘーゲルは、「肯定的なもの」と「否定的なもの」を単に形式的同一性の観点からではなく、それらの実質的内容の観点から見ているのである。「肯定的なもの」と「否定的なもの」は、形式的に同一の概念として見られるなら、相互に他者に転換することはあり得ない。しかしヘーゲルは、「肯定的なもの」と「否定的なもの」を一面では主概念の位置に据えて、その自立性を強調しておきながら、他面ではそれらをあくまでも反映二規定とするという二重の仕方で見えているのである。ヘーゲルの矛盾論理の分りにくさはここに起因しているように思われる。

ヘーゲルの難解な議論を理解しやすくするために、ヘーゲル自身が「矛盾が直接現われる」(Wt. 77) としている「関係二規定 (die Verhältnissbestimmungen)」(ヘーゲルの挙げている例によれば上と下、右と左、父と息子) を手掛りにしてみよう。例えば右と左は、概念としてみた場合、それぞれは自立的で他方を「含む」ということはあり得ない。むしろ両者は対立する概念として相互に排除しあう。だから「右は左である」という表現は不条理であろう。しかし、物の位置規定を表わす場合には、両者は相対的な関係規定として機能している。例えば「物体Aは右でありかつ左である」は、「物体Aは物体Bに対しては右であり、かつ物体Cに対しては左

である」を意味すると考えれば、可能な表現である。つまり同一の物が、右と左という二規定をともに受け入れ得るのである。「右であるものは同時に左であるものでもある」というように、両規定は相対的に転換し得る。しかし関係規定を自立化させて概念としてみると、右は右であって左ではなく、左は左であって右ではないというように、右と左の没交渉な区別が際立つことになるであらう。

位置を表わす規定のみならず、人間関係を表わす規定も同様である。父と息子は、概念としては父が息子を、息子が父を含むことはあり得ず、絶対的な同一性を保持しなければならない。両者はそれぞれ自立性をもち他者を排除する。しかし、「父である」と述定される或る男は、同時に「息子である」とも述定され得る。この場合には父と息子は相対的な関係規定で、一方は他方なしには成り立ち得ないのである。或る男が父であることは、別の男が息子であることと相対的に決まることであり、父であるこの同一の男が息子であることは、別の第三の男が父であることと相対的に決まるわけである。

〈肯定的なもの〉と〈否定的なもの〉の「それぞれが、端的に移行することであり、あるいはむしろ、それぞれの自分の反対への転換である」(WtL 62)と言われ得るためには、それぞれは形式的な同一性を保持する概念であってはならない。

い。ヘーゲルが両者を概念と呼ばずに、注意深く「自立的な反照二規定」と呼んだのは、それが形式論理学で言われる「概念」と混同されることを避けるためであったと言える。それぞれは、存在するものについての規定でなければならない。そうであって初めて、同一のもの(個体)が〈肯定的なもの〉にもなり〈否定的なもの〉にもなるというように、両規定が相互に移行し転換するのである。こうしてヘーゲルは、二つの自立的な反照規定を、ひとつの統一的な「根拠(Grund)」へと帰一する相対的な関係規定と捉えているのである。自立的な反照規定は、規定されるべき或る存在するものを根拠として前提していなければならない。

〈肯定的なもの〉と〈否定的なもの〉は、存在するものの「規定性(die Bestimmtheit)」つまり内容である。従ってこの自立的な反照二規定のそれぞれの「矛盾」は、存在するものに無関係ではあり得ない。近代の形式論理学では矛盾は、ある概念Aとそれが形式的に否定された概念非Aの両立不可能性であり、思考原理としての矛盾律により排除されなければならない。しかしヘーゲルの論じる「矛盾」は、存在するものの内容を表現する規定性そのものの内的構造を表わしている。従ってヘーゲルの言う「矛盾」は、形式論理学的矛盾とはその成り立つ水準も、その意味するところも異なっているのである。ヘーゲルは矛盾律に挑戦するかのよう

「肯定的なものと否定的なもの」兩者は、それ自体同じものであり、だから肯定的なものは否定的なものとも呼ばれ得るし、逆に又、否定的なものは肯定的なものとも呼ばれ得る⁽¹⁰⁾」と述べているが、これが矛盾律を犯していないことはこれまでの考察から明らかであろう。なぜなら、〈否定的なもの〉は〈肯定的なもの〉の形式的に否定された概念ではなく、〈肯定的なもの〉との相対関係にある積極的なひとつの規定性であるからである。兩者は形式的に外面的に否定しあうのではなく、それぞれが「自己のうちにおける絶対的否定」(W.L. 71)なのである。

われわれは次に、ヘーゲルがなぜ混乱を生じさせるような「矛盾」という言葉を使ったのかという穿鑿をするよりも、ヘーゲルが「矛盾」という言葉で表現しようとした存在するものの論理を考察することにしよう。

三

ヘーゲルの矛盾論理は、思考の形式を超えて、存在するものの運動原理を表わしている。それは『論理学』のみに帰属するものではなくて、その論理の具体的内実は、実在するものについてのヘーゲルの経験と思索のうちで形造られてきたにちがいない⁽¹¹⁾。それではヘーゲルの矛盾論理の原型はどこに見出されるべきであろうか。誤解を恐れずに言えば、ヘーゲ

ルの「自己意識」論にこそ見出されるべきであろう。そこでわれわれは、『精神現象学』⁽¹²⁾の「自己意識」論で展開される人間存在論を中心に考察を進めよう。

ヘーゲルは『精神現象学』の「悟性」論において、対立を固定化する「悟性」に対して次のような観点を提起する。

「思惟される必要があるのは、純粋な交替或いは自己自身における対立、つまり矛盾なのである」(PhG. 100)。ここに既に『大論理学』に先立って、「矛盾」についてのヘーゲルの基本的な考え方が現われている。そしてヘーゲルは、矛盾の構造を次のように「自己意識」のうちに見出すのである。「意識は自分だけで自立的で、それは区別のないものを区別すること、つまり自己意識である。私は私を私自身から区別し、そして区別されたものが区別されていないということが、そのまま私にとってある」(PhG. 134-136)。自己意識は自立的であり、自己同一であるが、しかし自己意識は自己を自己自身から区別し、自己を二重化して他者となり、このような区別を介して自己と同一になることが自己意識の自立性の条件をなしている。自己意識の自覚は、自己の区別、つまり自己の他者化を経なければ成立しない。

自己意識は抽象的な自己同一性ではあり得ないというのがヘーゲルの自己意識についての基本的な考え方である。ヘーゲルは、他者との関係の外に存在する自己意識を認めない。

むしろヘーゲルの理解は、自己意識とは他者に関係することそのものだということである。「自我は関係の内容であり、関係することそのものなのである。自我はひとつの他者に対して自我自身であり、かつ同時にこの他者を包摂する (übergreifen) のであり、同様に又、この他者も、自分にとっては自我そのものである」 (Pag. 188)。確かに「自我は自我である」という端的な同一性が確信はされても、それは、自我は他者ではないというように、他者への対立関係を既到自己内に含んでのことなのである。ヘーゲルの考える自我と他者との関係は、ひとつの自我とその他者が外面的に結ばれるというようなものではない。自我はそれ自身において、それに対立する他者を包摂し、この他者の方も又自我としてみれば、それに対立する自我を他者として自己内に包摂するのである。こうして両者は相互に他方に対立しあいながら、相互に包摂しあっている。

ヘーゲルは以上のような一般的な「自己意識」論に続けて、具体的な人間関係を「主人と奴隷」¹³⁾として論述している。そこには既に、『大論理学』の「矛盾」論で用いられることになる基本的カテゴリーが、具体的な内容をもって現われている。二つの対立する自己意識、つまり主人と奴隷についての次のように語られている。「自己意識 (主人) は最初、単一の自立存在であり、全ゆる他者を自分から排除することによ

り自己同等的である」 (Pag. 147)。このような自己同索性としての主人に対して、その他者つまり奴隷は「否定的なもの」と刻印されている。しかし主人は、奴隷の労働を媒介として自立性を得ているのであるから、実は奴隷に依存的に関係して初めて主人なのである。従って主人の自立性は、その反対である非自立性に顛倒する。「主人は自己を完成したところ、むしろ自立的な意識とは全く別の或るもの (非自立的な意識) になってしまっている」のであり、それとは逆に、「自立的な意識の真理としてあるのは、奴隷の意識の方である」 (Pag. 152)。

奴隷の方は、主人への奉仕のために労働しているという点では非自立的である。しかし、労働の対象を我が物とする点により、奴隷の方こそむしろ自立性を獲得する。「自立存在は主人の側にあるときには、奉仕する意識にとつてはひとつの他なるものであり、その意識に対してあるにすぎなかったが、……形成 (労働) においては、自立存在は奉仕する意識にとつて自分自身のものとなり、奉仕する意識そのものが、それ自体自立的に存在するということを自覚するようになる」 (Pag. 153)。こうして奴隷は、非自立性から「真の自立性へと顛倒する」 (Pag. 153)。

このように、主人と奴隷のそれぞれは、その実質的内容において、自分自身のうちにその反対へ顛倒するという構造を

有しているのである。主人は主人、奴隷は奴隷という形式的同一性は、両者のそれぞれの存在のあり方そのものにおいて突き崩されるのである。

ヘーゲルは自己意識を、自立性と非自立性という対立においてのみ考えていたわけではない。ヘーゲルは、「自己意識は精神であり、その精神は、その自己意識の二重化のうちで、両方の自己意識の自立性のうちで、自分自身との統一をもつと確信している」(PhG. 263)と述べているように、二つの自己意識の自立性が、精神というひとつの統一において成り立ち得ると考えている。そしてヘーゲルは、その具体的な場のひとつを「普遍的な言語」(PhG. 266)にみているのである。

二つの自立的な自己意識が、共有するひとつの言語を媒介にして対話する場面を考えてみよう。一方の自我が発話主体となり、もう一方の自我(他我)に話しかける場合、発話主体としての自我は、他我によって発話主体として承認され、又そのようなものとして自分を自覚している。自我はこの場合、他我を排除した抽象的な自己同一性ではなく、自己のうちに他我を意識し包摂している。自我の同一性≡自立性は解体され、他我にならなければならない。つまり自我は二重化されるのである。こうして自我の自立性は相対化され、他我を介することにより、新たな自我の同一性が得られることに

なる。今度は逆に、これまで話しかけられていた他我が発話主体となると、こちらの方が自我となり、これまでの発話主体が他我となる。このような対話における相互性について、ヘーゲルは次のように述べている。「ここには相互的でないようなものは何もないし、個人の自立性がその自立存在を解体すること、つまりこの自立性そのものを否定することにおいて、自立的であるという肯定的意義を得るのでないようなものはなにもない」(PhG. 263-266)。すなわち、自己意識≡個人の自立性の解体がそれ自身の自己否定性を通して捉えられ、それを介して個人の自立存在が積極的に捉えかえられる。対話において個人は、自我と他我の相互転換の根拠としての「精神」のうちにあるのである。

以上の考察から分るように、『大論理学』で展開される矛盾論は、既に『精神現象学』における自己意識の構造においてその内容が準備されているのである。われわれは、自己意識の構造において捉えられたヘーゲル独自の矛盾論理から、『大論理学』の矛盾論を豊かな内容において理解し得るであろうし、矛盾を核心とするヘーゲル弁証法の解明へのひとつの手掛りを得ることができるであろう。

(註)

引用文中の傍点はすべて原文の強調であり、() 内の語句は筆者が付加したものである。

(1) G.W.F. Hegel, Werke 6, Wissenschaft der Logik II, Suhrkamp Verlag, s. 74 (以下本文中の引用は W.L. と略記)。数字は頁数を示すものとする。

(2) 近代の矛盾律は同一律とともにライプニッツにより定式化された。ヘーゲルが直接批判の対象にしているのは、ヘーゲルの宿命的論敵である J. F. フリースやラインホルトの形式論理学ではないかと思われる。

(3) アリストテレス『形而上学』第四卷第三章 b20. 出隆訳、岩波書店、一〇一頁。

(4) アリストテレスは、黒と白を矛盾概念から区別して反対概念であるとしている。

(5) I. カント『プロレゴメナ』篠田英雄訳、岩波文庫、五四頁。

(6) I. Kant, Kritik der reinen Vernunft, A426・B454~A429・B457, Felix Meiner Verlag.

(7) アンリ・ルフェーブル『形式論理学と弁証法論理学』中村秀吉・荒川幾男訳、合同出版、二二七頁。

(8) アリストテレス『カテゴリー論』第二〇章では、「対立」は「関係」

「反対」に「欠除と所有」「肯定と否定」に区別されている。『形而上学』第一〇巻第七章でも、「関係」は「矛盾」から区別されて論じられている。

(9) 「関係」はその意味からみて「対立関係」のことである。「ヘーゲルは運動を「ある」と「ない」で表現しているが、両者は状態を表わす対立関係で理解されれば、矛盾とは別種と考えられる。

(10) G.W.F. Hegel, Werke 6, Enzyklopädie (1830), Erster Teil, Die Wissenschaft der Logik, Suhrkamp Verlag, s. 245.

(11) ヘーゲルは既に一八〇一年に「矛盾は真なるものの、無矛盾は偽なるものの規準である」(Habilitationsthesen 1) と述べている。

(12) G.W.F. Hegel, Werke 3, Phänomenologie des Geistes, 1807, Suhrkamp Verlag (本文中の引用は PhG と略記)。数字は頁数を示すものとする。

(13) アリストテレスは対立関係の例のひとつとして「主人と奴隸」を挙げ、両者が「換位的」であるとしている(『カテゴリー論』第七章)。

(つぎか) せいし・東北大学

法政大学出版局

東京都港区南麻布2-8-4/〒106
振替東京 6-95814 / 03-453-0717

フランコ・ヴェントウーリ／大津真作訳 百科全書の起源 二五〇〇円

百科全書編纂事業の開始と初期の発展を辿りその周囲に渦巻く多彩な思想潮流、若く無名の青年たちの動き、繰り広げられる新しい問題・感情・希望等々、〈百科全書の時代〉の精髓を見事に剔抉する啓蒙思想研究の古典。

マルクス主義的価値論 のための仮説 一三〇〇円

生産・社会・人格等を普遍妥当性と歴史性との重層せる価値として考察、人類史における自覚的な価値構築の絶対性、人間の実体の不減性を説き、価値理論に新たな地平を拓く。
アグネス・ヘラー／良知力・小箕俊介訳